

中・韓の伝統における商い心の比較

—連続テレビドラマ『商道』と『喬家大院』を中心に—

Difference of traditional dealing mind in China and Korea
—According to TV drama “Akindou” and “Qiajiadayuan”—

林 美 茂

Dr. LIN Meimao

中国人民大学哲学院

School of Philosophy at Renmin University of China

E-mail: mimolin1230@yahoo.co.jp

提要：在近代的中国和韩国的历史上，几乎是同时期各自出现了几个著名的经商群体，特别是中国的山西商人，俗称“晋商”，韩国的义州商人，史称“湾商”。晋商的巨贾乔致庸，湾商的首富林尚沃，两者的经营理念和成功秘诀都与东亚的儒家思想中“五常”伦理有关，两者都可以看作成功的儒商。不过，虽然他们在经商伦理的根本基本上基本一致，但是各自奉守的商道的侧重点却不尽相同。晋商乔致庸的商道在于坚守“信义”原则，而湾商林尚沃的商道表现在以“仁义”为本。这些特点我们可以通过中国的电视连续剧《乔家大院》和韩国的电视连续剧《商道》中所展开的各种故事情节中得到佐证。在这两部以历史上真实人物的商贾翘楚为主人公的电视连续剧中，我们可以看到儒家伦理对于树立正确的经商理念的巨大意义。也可以通过这两个事例矫正马克思·韦伯对于儒家思想与商业关系理解的偏颇。

两部电视连续剧揭示的都是儒家的“五常”伦理之“仁义礼智信”是成就一个成功商人的关键的主题。一个成功的商人，一般都具备超人的商业才能。而如果仅仅具有“商才”，不具备正确的商业价值观，那种智慧相反地往往会把那人引向自我毁灭的歧途。所以“智”一定要有“仁义礼信”作为基础才有成功的保障。在这一个问题上两国的理解完全相同。在以市场竞争为基础，以牟取利益为目标的商业社会中，晋商乔致庸的“诚信”为本、“以义取利”的经营理念是他能够起死回生、走向巨贾的根本之所在。而湾商林尚沃同样也是由于坚持“财上平如水，人中直似衡”的财富观、人生观，让他从银器店的伙计逐渐成长为朝鲜的李朝时代第一商人。不过，由于两个国家的历史与对于儒家思想的接受与消化不同，表现在女性观念上存在着很大的区别。晋商乔致庸把女性当作与自己对等的、甚至不可缺少的强有力存在，而湾商林尚沃则把女性降低到让自己走向成功的附属性地位。

关键词：晋商、湾商、五常、信义、仁义、智、商道

急激なグローバル化が進んでいる今日の世界では、企業の多国籍化、商品流通の越境化、資本の国際化は重要な課題とされている。近頃のアメリカでのサブプライムローン問題を発端とする金融危機は、世界全体を巻き込み、着陸場所の見えない泥沼が収束するどころか、一層広がっている。このような結果を生み出させた原因は、単に企業の経営理念やビジョンなどを提示することでは説明することが出来ない。その根本となるのは、人間の果てしない利益への欲望であり、これについて把握することが昨今の我々に肝心な事ではないだろうか。

企業経営をやや古い言葉で言い直すと、「商い」となる。ここで、日本語において同音の言葉を書き直すと、容易に「飽きない」という言葉が上げられる。もし、商売が「飽き」の満たせない欲望の心に身を任せ、その追求に走るようなこととなるならば、恐ろしい結果が待ち構えている。思うに、「商い」を営むことは、我々の根幹にある「心」を表し、それを互いに営むことではないだろうか。その出発点は心であり、帰着点も心に他ならない。現在の言葉でいう「経営倫理」という学問は、伝統の学問からみると、「実心」問題の探究範疇にある。理論的に倫理学をいくら立派に唱えても、実践の面でいかに活かすかがより肝要である。つまり、「言行一致」が如何に可能なかが「実心」の探究に重要な意味を持っている。そして、これが一番よく現れるのは、「商い」を営む実践の場である。小論は韓国と中国との伝統的な商い問題を取り上げ、このテーマに関連する両国で近年上演された連続テレビドラマを中心に説明する。この二つのテレビドラマのいずれも「商い」における「心」をテーマにしたノンフィクションのような物語である。

一、実在人物の物語

先に「ノンフィクションのような物語である」といったのは、『商道』に登場する主人公の林尚沃（イムサンオク、1778-1855、享年77歳）と『喬家大院』の主人公である喬致庸（キョウチヨウ、1818-1907、享年89歳）の二人は、いずれも歴史上の実在人物であるからである。また、二人はほぼ同時代の人で、どちらも自分の国でその時代の巨商として名を馳せていた。さらに、二人の経営理念や商いにおける心の構えにも似ている部分が多くある。他にも、同じ時期に中国でもう一人、胡雪岩（1823-1885）という巨商がいるが、敢えて喬致庸を選んだのは、彼が「以義取利」という商い理念を掲げる山西商人（晋商）であり、山西商人の商売を営む過程における自然と社会に置かれていた環境の厳しさが韓国の義州商人である林尚沃に似ていたからである。

まず前者からの紹介を始めようとする。林尚沃の生涯をテーマにして小説を書き上げたのは、崔仁浩（チェイノ、1945- ）という現代韓国を代表する国民作家であ

る¹。彼によると、「この林尚沃を取り上げることが、韓国民の自負心と、今日を生きるビジネスマンとして誇りうる師表を伝えられる最善の方法だと考えたのだ。なぜならば、林尚沃は、死ぬ直前、自らの財産をすべて社会に還元し、『財上平如水 人中直似衡』（財物平等な水に等しく、人は正しい秤に等しい）という遺言をのこした最上の人物であったのだ」²。この小説を読めば分かるように、主人公の林尚沃は、清国の国境に接する義州の貧しい交易商人の息子として生まれた。しかし、そのような貧しい身分から、自分の努力、人徳、商材、機運によって、並々ならぬ幾多の困難を乗り越え、朝鮮王朝時代最大の交易王になった人物であった。実在人物の林尚沃に関する歴史的な資料は、『朝鮮王朝実録』と林尚沃の著書である『稼圃集』と『寂中日記』がある。しかし、ストーリーの内容における主人公以外の人物は歴史上に実在した人物もいれば、架空の人物もいる。その関係と葛藤は虚構なものである。

内容が虚構であるので、改編されたテレビドラマは小説よりもずっと面白い。小説は、説教が多く主人公の林尚沃だけの商売の物語を展開している。しかし、テレビドラマの『商道』は、より複雑で、商売における正道と悪道があり、それぞれの結末に辿り着くという緊張感に包まれているので、より豊かな「商道」の内容になっている。このため、小論は小説とドラマの両方にある「商道」物語を交差に取りあげることにする。

次に後者の紹介をしよう。『喬家大院』は中国において最初に連続テレビドラマとして2006年2月に上演されたが、連続テレビドラマが放送される直前の2005年末には、脚本から書き直した長編歴史小説『喬家大院』はすでに出版されていた。ドラマの脚本も小説も同じ作者で、朱秀海という人である³。『商道』と違って、こちらはドラマと小説との内容がほぼ同じである。

この連続テレビドラマの主人公は喬致庸という歴史上の実在人物であり、清朝中期から末期にかけて「晋商」の巨商である。韓国の義州商人である林尚沃が清朝との人參貿易によって巨大な富を手にしたのと違って、山西商人の喬致庸は、主に中国の西北辺境の守備軍に食糧や馬の飼料などを供給することと、中国東南地方の福建、安徽などの地域からお茶を買って、北のモンゴル草原やロシア国境の町まで運び、売り飛ばすことを商いとした貿易商人であった。後に「票号」（中国における近代銀行の原型）業の経営に力を注ぎ、

¹ 崔仁浩：1945年ソウル生まれ、延世大学英文科卒業。1963年に短篇作品で「韓国日報」新春文芸に入選。1967年「朝鮮日報」新春文芸に入選したにより文壇デビュー。1972年現代文芸賞、82年李箱文学賞、99年にカトリック文学賞を受賞。——『商道』による。

² 『商道』（上）p.5. 青木謙介訳、講談社、2008年5月、第一刷。

³ 朱秀海：中国海軍政治部創作室一級作家、1954年河南省に生まれる。今まで数々の文学賞を受賞され、幅広い代表的な軍人作家の一人である。連続テレビドラマ『喬家大院』が放送されて以来、「金鷹賞」や「飛天賞」など中国の代表的なテレビ映画賞を数々獲得しており、日本語版と韓国語版の翻訳もある。

「汇通天下」の目標を掲げ、全国で金融網を構築し、「票号」の経営に大成功を取めた人物である。彼は徹底した「誠信」の経営倫理を通して先祖から受け継がれた商売を徐々に拡大させ、自分の優れた商材によって巨大な富を手にしたのである。清華大学出版社から出された『晋商翹楚——喬致庸の用人・経商・処世の道』（王宝明等著、2006年11月）の「まえがき」には、次の一節がある。

「喬致庸は遥かに他の商人より誠信、仁厚といった商業美德を重視する。彼の信用、義と利に関する理解は次の順序になる。信は第一、義はその次、最後は利である。彼はこれを忠実に実行し、顧客に最大の利益を与え、自分もさらに多く顧客を獲得し、利潤の長久最大化が実現され、他人には及ばない声名と地位を得たので、商業精神の領域には一代の巨商の典型代表となった。」

歴史上の実在人物をテーマに作られたドラマであるからこそ、『商道』も『喬家大院』も放送されて以来、韓国、中国、日本において大反響を引き起こし、出版された小説はいずれも数百万部に上る売り上げを記録した。特にグローバル化の波に乗せて、市場経済が世界規模に広がった商業社会を生きるビジネスマンやサラリーマンの間では、二つの小説、ドラマの人気の高まる一方である。

二、「仁義」と「信義」：『商道』と『喬家大院』との相違

商売においては、「義」と「利」との関係はどうすべきかの問題に直面するのが避けられないであろう。正しい商い心は、必ず「義」を「利」よりも優先させる。これは『商道』にも『喬家大院』でも同じく大いに取り上げられている。また、それが彼らの成功の源となっている。しかし、その「義」とは、何に基づくのか、中身が違ってくる。両国の「商道」思想を語る二つのドラマは、その違いを見せている。

『商道』で繰り広げられた義州商人の林尚沃の成功秘訣は何と言っても「仁義」によるものである。これに対して、『喬家大院』に描かれている山西商人の喬致庸を巨商へ導く秘訣だったのは「信義」である。二つのドラマで、それぞれが唱えている商い心がやや違っている。このことから、直ちに二つの国の商道が違うことに結びつけるには無理があるものの、実際のところ両国の潜在意識はかなり異なっている。「仁義」を商いの要とみなす「商道」は、商売はどうあるべきなのかと人間はどうあるべきなのかという点で、同じ結論に辿りつく。林尚沃の師匠にあたる洪得柱が最初に彼を教えた商いの真髄は、まさに「商売は人心を儲け、利益を儲けことではない」という心得である（小説には、林尚沃が父から受けた教育となっている：「商即人」、つまり「商いは人あり、人は商いである」という言

葉である。『商道』p.99, 講談社, 2008年5月)。人心を得るために、「人を愛すること」は根本となる。これは小説『商道』に「義」という徳目であると理解されているが、私は「仁」であると思う。これに対して、「信義」を商いの要だとするならば、その主目的は「信義」にあるのではなく、あくまでも商売のためであり、「利益」を正当に手に入れるという潜在の利益追求が隠れている。山西商人の「義を以て利を制す」という経営理念はこれを反映している。勿論、商売において正しい道を通して利益を獲得することは別に悪いことではない、むしろ利益を得ることは商売の基本である。よって、ここにおける両者の比較は、商い心の違いだけの意味であって、どちらかが尊いかの指摘ではない。

周知の通り、「義」とは、儒教思想における人倫五常の「仁義礼智信」にある徳目の一つである。「義」の観念は、人間の行為正当性を計る徳目で、その対象は他人よりも、自分自身に向かって人間性を問い直すことである。『中庸』には：「義とは宜しくなり」（義者宜也）と説明がある。漢の董仲舒が言う：「仁の法は愛人に在り、我を愛するに在らず。義の法は我を正すに在り、人を正すに在らず」（仁之法在愛人、不在愛我；義之法在正人、不在正人。『春秋繁露・仁義法』）。つまり、「仁」は人に向かうのに対して、「義」は自分に向かって、自分の行為が正当であるかどうかを見つめる徳目である¹。それゆえ、「義」は商売においては最も基本な心得であることがわかる。

また、「五常」の第一徳目である「仁」とは、「人を愛する」ことを基本とする。「人を愛する」とは、他人を自分と同様な存在であるように見ることであり、他人を愛し、私利私欲を捨てて、報いを求めないことである。「仁」の具体的な表現は「忠」と「恕」である。曾子曰く：「夫子の道は、忠恕のみと」（夫子之道，忠恕而已矣。『論語・里仁』）。ここでいう「忠」とは心を尽くし、力を尽すということである。「恕」とは人を接する時に、「如心」があること、つまり他人の心を自分の心と同じように感じ、人の痛みを痛むことである。「子曰く：其れ恕か、己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれと」（其恕乎！己所不欲，勿施于人。『論語・衛霊公』）。『中庸』にはさらに「仁」の中身を具体化した。「仁とは、人なり、親を親しむ大と為す」（仁者、人也、親親為大）。これは『論語・学而』にある有子という「孝弟なるものは、其れ仁の本となるか」（孝弟也者，其為仁本與）という問題に答えているようになっていく。ここでは、「仁」という徳目は、目上の人を敬い、親を孝行する問題に関わってくるようになる。

以上のことから、『商道』の主人公である林尚沃の成功の秘訣は、まさに「仁」を根本とする「義」を守ることによっていることがわかるであろう。つまり、「仁義」の生き方にあるのである。彼の「商道」は、崇高な「仁義」に基づく商い道であったのである。

具体的なストーリーをみてみよう。小説の『商道』には、林尚沃の巨商への道は、「殺身成

¹ 本論文における人倫「五常」の「仁、義、礼、智、信」に関する内実と相互構造の諸見解は、中国人民大学哲学学院の羅安憲教授がこの問題に関する諸研究を参考に当たる。

仁」,「舍生取義」から始まることとなっている。最初に燕京へ人參貿易に使われ、主人の洪得柱から50キログラムの朝鮮紅參を清国の都の燕京において高値で売った。その内、250両の天銀(通貨の単位)を自分の儲けた分としている。このことで洪得柱が、林尚沃をこれから商人として独立させるつもりだったことを林尚沃は理解していた。しかしその途中、同行の商人、そして親友となった李喜著に連れられ、妓楼で父に売られた紹興出身の生娘張美玲に出会った。彼女を救うために、自分の250両に加え公金250両を使って、彼女を妓楼から救い出した。この決心が彼にとって何を意味するのかが彼が最初から分かっていたはずである。それは「独立の機会を放棄したばかりではなく、商人としてありうべからざる犯罪に手を染める決断」であることを意味する。しかし、彼は自分のことを顧みず「仁義」のある行動に踏み切ったのである。つまり、彼女救うためには、何かを求め、報いを期待することは全くなく、ただその子を救いたい、これは人間としてあるべき道だと考えたのである。その結果、彼は義州に戻ってから洪得柱の店から追い出させられ、さらに義州の商界から永遠に追放されたのである。途方にくれたあげく、彼は世間を捨て、秋月庵に出家した。それによって、母親が乞食になってしまった。このストーリーはテレビドラマでは改編され、清朝の葉商人である王造時が林尚沃の才能に感慨し、彼に200両の天銀を贈った。彼はその金で妓女の張美玲を救ったことに書き直された。これによって彼は洪得柱に認められ、銅器店の学徒から「灣商」の書記に抜擢されたとなっているが、小論の内容は、この部分では小説のストーリーを選んだ。なぜなら、この部分の小説の内容は、まさに仁の徳目にある「身を殺して仁と為す」最高の事例であったからである。

また、小説にここにおける後のストーリーも「仁」の徳目にあたる。出家した林尚沃のところに「松商」朴鐘一という人がやってきた時のことである。この事件の真相には、救われた張美玲が、その後、燕京商会の大物の夫人になったので、彼に恩返しを果たすために、数年間にもわたって韓国の義州商人の林尚沃を探し続けたことがある。そこで、「松商」朴鐘一という人が、この情報を持って林尚沃の居場所を突き止めたのである。そして、張美玲の代理人の依頼で5000両の銀票を持ってきて、彼に出家をやめさせ、もう一度俗世間に戻り、一緒に商売をやるよう説得し続けた。そこにおいて、林尚沃の心を動かしたのは銀票ではなく、母親の困窮から救い出し、親孝行するためであったのである。前述のように、「親親」は「仁」の徳目にある内実の一つである。このように、『商道』において、林尚沃が自分の起死回生のきっかけとなったのは、まさに自分の「仁徳」にのっとって行動しようとしたからなのである。

一方で、テレビドラマでも林尚沃の仁徳のあるストーリーは少なくない。例えば、被災民を救うために力を尽くして食糧を買い占め、安価で被災民に売ることや、食塩を買い占め、災害によって混乱している食塩市場を安定させたことや、低い金利でお金を人々に貸すことなども仁徳ある行動である。他にも、官婢の尹彩淵を連れて逃げることや、父の仇であ

り、官奴となった朴周命を救ったことなども、いずれも「仁徳」に関わる。人を愛し、人の痛みを痛むことが出来る心を持つ「如心」があるからこそできることであり、人間としてどうあるべきかを弁えている人でなければ成し遂げないことである。そして、林尚沃はまさに自分の数々の人並ならぬ善行という「仁徳」によって自分の苦難や災難を乗り越え、巨商へと成長してゆくのである。

これに対して「信義」に基づく喬致庸はどのようなことをしたのであろう。

「五常」における「信」の徳目はいつも「忠」と一緒に語られている。孔子は「言は忠信あり、行は篤敬ある」（言忠信、行篤敬）を唱える。ここは「言」と「行」の問題に絡んでいる。「言行一致」ということは、「信」の最も基本となる。つまり、「信」は人の行いによって示されるのであるから、言ったことは、必ず守ることが大切なのである。孔子曰く：「人にして信無くば、その可なるを知らざるなり」（人而無信、不知其可也。『論語・為政』）。それゆえ、「信」という徳目は、商売にとって、「義」につぐ重要な倫理である。「信」の理念を守り、「義」の精神と一体になった山西商人である喬致庸は、その商売において自分の「信義」のお陰で数々の困難を乗り越えてゆくのである。

具体的にストーリーの内容をみてみると、死んだ兄の手から喬家の経営を受け継いだ喬致庸は、義理の姉に結婚させられたばかりの妻を通して、義理の父から30万両の白銀を包頭（ホウドウ）まで運び、倒産寸前の祖父の代から苦心経営をして、やっと一定規模のグループ企業に成長した「複盛公」の店を窮境から救い出した。一息ついたと思いやきや、町を巡っている喬致庸は、自分の店の中の一部の分店には、ゴマ油に野菜油を混ぜて売っていることを発見した。彼は直ちに包頭市民に布告を張り出し、既に売られた問題のゴマ油を買え取りをすることと、それから各店に「誠信」という扁額をかけ掲げた。このように、「複盛公」経営の立て直すに最初にやるべきことは、失った顧客の信用を取り戻すことであると考えたのである。これが功を奏して、倒産寸前に陥った「複盛公」グループは徐々に新たな経営軌道にのった。

これに成功した喬致庸は山西から南下して、福建の武夷山のお茶を買いしめ、モンゴル草原へと運び、牧民たちに売り飛ばすことを試みた。さらに足が進み、ロシア国境の町までお茶の販売店を開いた。特に、他のお茶商人と違って、「複盛公」の分店で売られる「砖茶」（お茶を蒸して固めたもの）を、55グラムごとに作り、5グラムを多めに入れたとして、50グラムの値段で売る。これも彼が顧客に信用を獲得するためである。そして、その後、ロシアとの故郷の町（ポアルト）で、「票号」を経営する店に出会った。これは、彼のその後の人生において、巨商へと成長する重要なきっかけとなった。

「票号」とは、現在の地方銀行のようものであり、中国では、一部の学者はこれを中国近代銀行の原型だとみなしている。つまり、一種の銀行のような金融企業である。当時、中国の南方には「錢莊」があり、北方には「票号」がある。「票号」は物的な商品を扱うので

はなく、金を保管、流通させ、手数料を取ることで経営を成り立っている。預金、貯金、送金、兌換などを業務とする「票号」は、法的に何も保障のない時代において、それを支えるのは、ただ「信用」以外にはなにもないと言えよう（史料の記録によると、喬致庸が経営している企業グループには、二つの「票号」を持っていた。それは「大徳通」と「大徳興」であった）。

上のように、『喬家大院』に取り上げられる喬致庸の商道は、何よりも「誠信」を最優先していたのである。

勿論、以上はあくまでも両者の特徴的な側面を纏めただけで、それぞれが目指している「商道」の重点が違っていることを指摘するためであり、必ずしも義州商人には「信」が重要視をしないと、山西商人は「仁」がないとかいうことではない。むしろ、『商道』には、『誠信』の問題がかなり取り上げられている、「義州商人」の鉄則は、「絶対に他人を欺いていけないこと」であると小説『商道』には数回にわたって述べている（cf. p.27, 129, etc.）。一方の『喬家大院』において、喬致庸が商人の人生での最初の成功を取めたのは、彼の兄の死を機に科挙の道を捨て、包頭（ホウドウ）に行き、兄が残した倒産寸前の企業の残局を救い、ライバルの「達盛昌」に壊滅的な打撃を与え、逆に相手を破産の状況に追い込んだのである。しかしこの時、彼は、兄の仇である「達盛昌」を救い、それを活かす道を選んだのである。そして、その時ライバルの東家¹である邱天俊は、感無量な言葉を発した：「仁義なり」と。このように、それぞれが両方の徳目を持っている。しかし、敢えて言うならば、両者は先ほど述べたような違いがあったのである。

三、「商い智恵」と「商い心」との関係

中・韓両国が創作したこの二つのドラマは、いずれも商いにおける正道はどうであるべきかを語り、正道と対比させるために、悪徳業者の行いをも描いている。

商売においては、情熱だけでは商売ができない。成功を取めるには、人から秀でる才能が要求される。商売の成功者は、必ず人並外れた何らかの才能を持っている者である。つまり、「商い」には、かなりの「智恵」が必要である。しかし、ここで誤解してはいけないのは、「智恵」あるものは必ず商売で成功を取めるとは限らないことである。「智恵」のあるものが、正しい「商道」を踏むことによって、初めて成功を取めるのである。この考えは、韓国の『商道』にも、中国の『喬家大院』でもほぼ一致している。

「五常」における「智」とは、孟子の理解からすれば、「是非」の観念である。孟子曰く：「是非の心、智なり」（是非之心、智也。『孟子・告子上』）。この「是非の心」は、正しいかと

¹ 企業の所有者は東家と呼ぶ。大掌柜は経営マネージャーである。

うかは、「智」があるかどうかを意味する。「是非」を問わず、ただ利益ばかり追求する商売は、一時的に成功するかもしれないが、そのうち、必ず自分の悪によって破滅の道に辿りつく。このような商売は往々として「商術」を講ずるが、「商道」を求めない。小説の『商道』では、「商術」と「商道」の違いを峻別している（『商道』p.129）。一方では現実主義的であるのに対して、他方は理想主義的である。「商術」を追求するものは、手段を選ばず利益追求の方向に傾きやすい。「商術」を重んずる悪智恵ばかりを働かす商人は、最終的に破滅な道へと陥って行くに違いないということは、二つの物語で共通したものである。

テレビドラマの『商道』での商い心の正道の代表は、勿論林尚沃が所属する「湾商」¹の側であるが、最初に「湾商」の大都房の洪得柱は、商いの心構えはどうあるべきかを言葉と行動の両面を通して林尚沃に教えた。そして、その心構えを実行するのは主に林尚沃であった。彼は自分の鋭い観察力、正確な情勢分析力、漢学教養と語学力を通して正々堂々と競争相手に挑み、最後に成功を導いて行く。例えば、最初に許行首を説得して、清国商人が運んできた鉛を買占め、「松商」から1000両を儲けたこともそうだったし、さらにその後、燕京で他の商団が安値で売り飛ばした人参を全部買占め、清の薬商人の「不買同盟」を破り、巨商となる富を手にしたのはまさに彼の正当な戦い結果である。

それに対して、悪道商人の代表とされる「松商」は「信用」の問題を除いて、皆林尚沃と正反対であった。利益を得るために手段を選ばず、必要に応じて人の命を奪うことも平気にしていった。林尚沃の父親の命もこのような悪道によって奪われ、「湾商」の柵門における秘密貿易権を奪うために、参田を焼き、それを育てる人を殺した。さらに「湾商」に打撃を与えるために、食糧倉庫を密かに放火して焼き尽くしたことや、柵門で秘密人参貿易を発覚させないために、洪得柱を暗殺したことなどはその悪徳を明らかに示していると言えよう。始めのうち、冷酷で情さえ見えず、悪ばかりを働いたのは「松商」の大都房の朴周命であった。だが、彼はやはり自分の悪によって、最終的に大都房の座が部下に奪われ、自分が育てた人に裏切られ、死ぬ寸前までの窮境に追い込まれたのである。しかし彼は、この件があった後、自分の間違いを認め、正道へ転換したのであった。

これに比べて、さらに極まりのない悪道が存在している。それは鄭仁寿とその手先の張石柱である。鄭仁寿は最初に洪得柱の「湾商」を裏切って、「松商」の朴周命の元に走った。その後、彼はさらに朴周命を裏切って、「松商」の大都房の座を狙った通りに手にした。だが一方で、彼は正道の洪得柱を裏切ったといっても、それを憎んでいない、逆に心の何処かにまた情が残っていた。それゆえ、洪得柱が暗殺された後の弔問で、泣き崩れた姿も見せた。しかし、やはり同じ悪道の朴周命を裏切った時、それを死ぬまで追い込まねば気が済まず、まったく少しだけの恩義をも感じていなかったのである。

¹ 当時、朝鮮の商売人は義州の商人を「湾商」と呼び、開城商人を「松商」と呼んでいた。

しかし、このような悪徳業者の商いとは違い、正道の商人林尚沃は、父親の仇を捨てて、世俗な恩讐を乗り越え、輝かしい心の光を放っていた。彼は悟っていた。「憎しみの心で商いができない。そして、本当の天下一の商人になるために、個人の怨念を乗り越えなければならぬのだ」と。彼にとって、商うことは、人間としてどうあるべきかのことに直結している。だから、彼は「商術」を講じて商売をするのではなく、「商道」を求めつつ商いをし、朝鮮一の大商人へと成長して行くのであった。勿論、最後に正道は邪道、悪道に勝って、ドラマのクライマックスを迎えたのである。

『喬家大院』にも『商道』に似ているストーリーが存在する。正しい商道を踏んでいるのは喬致庸であり、そのライバルの「達盛昌」大掌柜の崔鳴十と崔鳴九兄弟は黒い心の悪道である。崔鳴十は喬の兄を死にまで追い詰めた。東家の邱天俊はそれを快く思わなかったにもかかわらず、崔鳴十が盗賊と手を組んで喬の一行を襲う。事件が発覚されたので、崔鳴十が投獄された。そこでその弟の崔鳴九が大掌柜に登用されたが、この弟は兄より冷酷で、嫉妬心が強く、数回にわたって喬致庸を死に追い込もうとした。しかし結局、その目的はいつも達成できなかったため、馬車夫として喬致庸の家に身を潜み、両親の仇を討つことを図っている鉄信石に、その暗殺の計画を持ちかけた。この馬車夫はすでに喬の数々の善行に感銘を受け、喬を殺すから彼を守る立場に立ったのであった。それを知らなかった崔鳴九は、最期に鉄信石に殺されたのであった。

実は、崔鳴九と鄭仁寿とは、いずれも優れた商売才能の持主であるが、ただその才能は悪に走ったので、結局、破滅の結末になったのであった。正々堂々と相手と経営の競争をすれば、よい結果を出せる人物に違いないが、知恵を悪い心に働かせたので、自分の悪によって破滅へと導かれたのである。だから、商いにおいては「智慧」が必要だが、知恵があるだけでは何もならない。なぜなら、その知恵の使い方は「心」によって変わるからである。正しい価値観、人生観を持っているから初めて正しい「心」の使いが可能にし、正しい「心」に働かせているから、人間の智慧を素晴らしいものになる。特に商売において、この道に適った「心」が求められるのである。商売において、五常の徳目の一つである「智」、すなわち「是非」の心はいかに重要であるかを二つのドラマで物語っている。

それでは、「商い心」はどうであろう。実は、「商い心」は三つの領域があることが周知の通りである。それは経営者の心と従業員の心と社会の心（＝顧客の心）に分けられる。「商い心」を考える際に、この三つの側面に視点を配る必要がある。成功へ導く商い心は、まずこの三つに分けられている心のバランスをとっており、偏らないことが重要である。つまり、経営者の正しい心構えを持つこと、如何に周りの心の一つに纏めること、そして、どういう行いを通して社会の心を得られることが、決定的な意味を持っている。勿論、これらを可能にする根源となるのは、経営者としてのその人の徳性に委ねられている。経営者の徳性は、まさに前述した人倫五常をしっかりと身に着けることから生まれるのである。

韓国の『商道』には、この問題をストーリーの中に三つに分けて、具体的に展開を見せていないが、『喬家大院』には、きちんと三つに分けてその展開を見せている。例えば、喬致庸の家族を思う心がかなりの見せ場を提示している。また恋人に対して、友人に対して、従業員に対して、ライバルに対して、等々、いつも偽りのない「真心」、「愛心」、「誠心」を働いていることをストーリーの中に展開されている。逆に掌柜たち、伙計たちは、喬致庸に対して同じく偽りのない「忠心」を尽くし、これらの内容を大いに描かれている。

勿論、『商道』は直接にストーリーの中に三つの領域によって展開しないものの、全体的には、主人公の林尚沃の商い心を描く物語に変わりがない。その心は「商道」を悟る過程の中で織り込まれているのである。いずれにせよ、『商道』と『喬家大院』は、商いにおける経営者が踏むべき正しい道を我々に提示し、商業社会が普及して行く21世紀の世界に、儒教倫理に基づく東洋人の崇高な商業道徳を掲揚させているのである。

四、『商道』の限界と『喬家大院』の課題

『商道』は、小説にしても、テレビドラマにしても同じ問題を抱えている。問題は二つあると思われる。一つは男性が女性に対して如何なる態度を取るのか、という問題である。詳しく言うと、韓国における男尊女卑の思想が根強く残っていることが『商道』を通して覗うことができることである。小説やドラマを創作したのは現在の人であるからであるので、これは、現在の韓国の現状を反映しているとも言えるかもしれない。もう一つは、巨大な富を築きあげだが、最後に富を社会に還元する時のあり方に問題がある。『商道』の主人公である林尚沃は、散財の方法があまりにも格好が良すぎて、ある程度の傲慢さを露呈している。これによって、『商道』が唱えている巨商の林尚沃にしては、人間としての大きさに影を落としているかのように感じさせられる。

具体的には、以下のストーリーになっている。

小説の『商道』には、林尚沃が五十四歳になった時、すでに朝鮮王朝の巨商になり、清朝との人參貿易権を一手に握り、巨大な富を手にしていて朝鮮一の貿易王となった。まさに人生と商売を絶頂期に達する時期であった。その時、農民一揆のような「洪景来の乱」が起きたが、彼は義州城を守る事に大きな役割を果たしたので、五衛将の任に就くように要請されたが、それを辞退した。その後、も一度官営中軍に任命されたが、同じく断った。しかし、最終的に国王の特旨が下され、拒否することができなくなり、郭山郡守となった。そして、この単身赴任の地で若くて美しい妓生の松伊に出会った。その時、松伊は二十歳の乙女だった。あまりにも見覚えのあるように感じたので、気になって密かにその子がなぜ官妓となったのかを調べ、自分の嘗ての親友の娘であることを調べ上げた。その親友とは、前述した最初に清国へ行く途中で山海関の夜に出会った李喜著である。李喜著は「洪

景来の乱」の首領格で、反乱を起こした大逆罪人となったので、その娘は松伊だから、官妓となった。そこで、林尚沃がその子の妓籍を消し、良民に戻させ、救ってあげる唯一の方法は自分の妾にすることしかなかった。林尚沃は悩みに悩んだすえ、その道を選択したのである。ここまでは美しい話であるが、問題はその後である。

林尚沃は郭山郡守になって間もなく、当該地方の水害があつて、それを救うために義損の財物を供出した功勞にて亀城府使に任命され、昇進の勅旨が下された。しかし、彼は知辺使に摘発され、昇進を果たせなかった¹。それどころか、突然に投獄されたのである。表向き理由は義州邑・參峰山の麓に建てた父上の墓所を眺めることが出来る豪邸で、国法を破ったせいであるが、本当の理由は親友の娘を妾にしたことである。その後分かったことであるが、林尚沃は親友の李喜著の晒された首を秘かに盗み取って、親友の故郷にある人の知らない島に埋めたことを知辺使たちが既に調べ上げていたのだ。それなのに、二十年後、さらに官妓となったその大逆罪人の娘を娶って妾にしたということはあまりにも大胆になりすぎ、知辺使にとって目触りだったからである。しかし結局、彼は、商売のパートナーであり、友人でもある開城商人の朴鐘一の救命奔走によって軽い刑罰（安置刑）で済んだ。監禁を解かれた林尚沃は、師匠の石崇和尚（金剛山秋月庵の高僧）から贈られた「戒盈杯」の謎を解くために旅に出た。すべての謎や真相が分かった時、彼は金剛寺の大雄殿で自分の人生について悟った。それから家に戻り、三つのことを実行した。一つ目は新築したばかりの自分の豪邸を取り壊すこと。二つ目は松伊に両親の真相を分からせ、彼女を自分の元から突き放し、遠くへ行かせること。三番目は自分が商売の世界から退き、経営権を朴鐘一に譲ること、である。

一番目と三番目については言及しないでもいいが、問題なのは二番目のことである。既に結婚式をあげ、初夜を捧げ、正式に林尚沃の妾となった松伊にとっては、林尚沃は待ちに待った恩人であり、心から愛する夫でもあった。しかし、その林尚沃の帰りが、自分のそれからの悲惨な運命の始まりとなったことは問題であろう。

林尚沃の考えは、自分が松伊と結婚して、妾にしたのは、彼女を救うためであった、しかし、彼女は自分の「快樂」への欲望を掻き立てる女色の魔でもあるから、彼にとって邪悪な存在であったのだ。だから、彼女に金をやって、遠くへ行かせて、彼女を自分から突き放すことは、両方とも活かす道に繋がるという独り勝手な「悟り」を持っている。しかし、林尚沃は自分がいくら悟ったと言っても、彼女の肉体と雲雨交えた以上、彼女は彼を心から愛し、一緒に墓に入るという決心をした人だから、それを金で解決するやり方が本当に偽善の極まりとしか言いようがないと思う。可哀そうなことに、松伊は「恩人」の望

¹ 知辺使とは、備辺使（李朝時代、辺境防備と国政を司る最高の議決機関）に所属し、身分を隠して国境地帯を回って、防衛態勢を監視する一種の変装をして地方官僚の治績と不正を調べ、摘発する暗行御史のような存在である。

むままに彼の元を離れて、遠く漢陽に行って一人生活を強いられるようになった。愛する人のために炎のように燃える性に芽生えたばかりの若い肉体であったにも関わらず、夫のために貞潔に守り、生涯を通してその貞潔を守り通した。しかし、恋は簡単に人間の力で抑えることが出来るものではない。自分の欲望を抑えるために、貞潔を守るために、急遽彼女は天主学徒の信仰に惹かれて行き、朝鮮王朝の「邪学討知令」により血洗の鎮圧を繰り返している時期であることも顧みず、とうとうカトリックに入信した。彼女は愛する人と一緒に暮らせないなら、自ら生まれかわねばならなかったからである。そして、この信仰によって、彼女は最期に石打ちで殺されるという最も残酷な刑で死んだ。しかし、その時に林尚沃は野菜畑を作り、詩を読み、悠々自在の晩年を暮らしている。私には、彼女を殺した張本人は林尚沃であり、しかも、最も残酷な手段で親友の娘を悲惨な最期を与えたのであるさえ思える。

このストーリーを通して見えてきたのは、林尚沃にとって、——彼本人は女性に溺れていないにも関わらず、潜在意識には——女性は自分と平等な存在ではなく、単なる男性の快樂欲望を満たす存在に過ぎず、男性の救ってやる対象であり、同情の対象に他ならない。こればかりでなく、さらに女性は不吉な存在でもあり、「すべての魔の根源には必ず女性が存在していた」（小説『商道』中巻、p.320.）と見做しているのである。実際、この小説には、林尚沃と妻との関係については、ほとんど触れていない、子息たちとの関係も同じである。商売においては、女性の役割が無に等しい。女性らは、単なる商売に成功した林尚沃に養われた存在に過ぎないと考えている。

小説の『商道』と違って、テレビドラマはこの辺の内容を大分書き直した。松伊の存在は彩淵と妙玉という二人の美しい女性を登場させたのである。彩淵は元弘文館大提挙尹成弼の娘で、父親の冤罪死によって官婢となったが、同じ冤罪で官奴となった林尚沃に知り合って、二人が一緒に逃走している過程の中で、林尚沃は彼女の面倒を見続けた。その過程の中で、彼女が徐々に林尚沃の商人としての才能と正しい生き方に惹かれて行き、林尚沃に強い恋心を抱くようになった。しかし、林尚沃が彼女に恋心を持っていないことを知り、林尚沃を救うために林尚沃を脅したライバルの朴周命の希望に沿ってその傍に侍女となって、朴周命の命ずるままの生活を選んだ。その後、父の冤罪が晴れ、官婢の境遇から脱出し、戸部正郎張銘国の妻となった。しかし、彼女は林尚沃の恩情と愛情を抱き続き、最後の最後まで林尚沃を助け続けた。一方、これに対して、妙玉は林尚沃のライバルの娘で、非凡な商材を持ち、しかも正しい商い心を持っている女性である。彼女は林尚沃と出会った時から心が奪われ、林尚沃も彼女のことを深く恋していた。しかし、彼女は朴周命の本当の娘ではなく、表向き娘として義州松商の経営権を握っているが、実際は朴周命の若くて病死した一人息子の未亡人であったのだ。この原因もあったので、彼女は林尚沃への恋心を抑え、また林尚沃からの求愛も最後の最後まで拒否し通した。このような関係だ

から、彼女は自分の義理の父親が林尚沃の父を死に追い込み、林尚沃の訳官への夢を摘み取った張本人であったことを知ったにも関わらず、林尚沃を秘かに助け続けた。だが、最後にはやはり彼女も林尚沃によって救われる運命になった。なぜなら、林尚沃がいなければ、彼女が処刑されるか、一生官妓として終わるかの人生に見舞われるに違いなかった。林尚沃は彼女を官妓の苦難から救い出して、さらに奪われた彼女と父親が経営する松商の大都房の地位を奪い返してあげたのであった。

以上のストーリーからも分かるように、この二人の女性の存在は、その境遇と運命は両者で違うものの、やはり林尚沃の存在がいなければ、いずれも官妓から抜け出し、新たな人生で生きられなかった。ここで見せている彼女らが林尚沃を助ける存在の一面もあるものの、それはあくまでも林尚沃を朝鮮王朝第一の巨商になるための外部要素に過ぎなかった。一番肝心な女性を男性と平等に取り扱い、男性の愛しい存在であると同時に、ライバルのような対等な存在でもあるという視点が見えないのである。

次に、第二の問題を具体的に見ていこう。商人は商売によって富を蓄積し、その富をいかに社会へ還元して行くかは商売を営む人たちの共有の課題である。これは古今東西を問わず、いつも問題にされる商い心に関わるテーマの一つであると言えよう。崔仁浩は小説『商道』を書く動機の一つも林尚沃の散財行為を称えるべきだと思ったからである。小説には、林尚沃の散財物語が主に二つの原因によって展開されている。一つは人を救い、他人を活かすためである。もう一つは自分が商道を悟り、財産を社会に還元すべきだと悟ったからである。最初に燕京で人参を売って儲けた250両と公金250両を合わせて500両で清国の青楼妓女の張美玲を救ったのは、彼のその後巨商になる重要な踏み台となったので、これは問題がない。そして、朝鮮王朝が災害に見舞われる度に彼は被災民を救い、食糧、食塩、資金を調達し、大きな社会貢献をした。小説はこれらについて具体的な内容はあまりないが、テレビドラマには、より具体的な活動を描いている。まさにこのような社会貢献によって、彼は人心を得て、商売は一層うまく展開されたと同時に、当時の「士農工商」階級社会において、もっとも身分の低い商人が郡守に抜擢された原因となったのである。これも異議がない。私は問題だと思ったのは、林尚沃が人生の最後に、借金者の借金を帳消しにした上、さらに銀塊や金塊を借金者に持たせて帰らせるということである。これは如何にも格好よく見せる散財の施しとしては、ある種の金持ちの傲慢ささえ思われる。勿論、このストーリーは小説やドラマでは必要とされ、主人公の姿をより高く上げるための文学手法かも知れない。しかし、これはむしろ逆効果になってしまう。なぜなら、お金というのは普通の人にも、商売人にも重要なものである。手段を選ばず、むやみに金を求める人間は、いつか破滅の道を辿るに違いないが、正当な方法や自分の知恵、あるいは労働によって得た金は大事にしなければならない。仮に商売が大成功を収め、大金持ちになったにしても、その獲得した1円1円は、経営者の知恵、判断、決断および従業員の汗の賜

物である。与える側にも受け取る側にもそれを大事にせねばならない心得が必要である。確かに「財上平如水」という財富観を悟った林尚沃は、自分のそれまで手にした金を社会に還流して行くことは当たり前の選択だと思う。しかし、その還元の方法はいくらでもある。だが、無条件に人に与えることは、かえって人をだめにさせてしまい、人の自尊心を奪い、与える側の自己満足にしか何ももたらさないのである。

以上の二点は『商道』が唱える商い心を物語化する時の影の側面だと思う。あるいは『商道』の作者は商業倫理を扱う際に思想の限界だと言えよう。これに対して、『喬家大院』は、『商道』に存在するこの二点をいかに克服するのが課題になる。このように比較して説明する理由は、『喬家大院』のストーリーは『商道』から所々で影響を受けている痕跡が残っているからである¹。しかも、『喬家大院』には、『商道』に存在する先の二つの問題に対して、ほぼ解決の道を提示しているのである。

まず一つ目の問題についてだが、『喬家大院』で男性にとって女性は、非常に重要な位置に存在している。なぜなら、主人公の喬致庸は、いつも九死一生の状況に陥った時、女性によって救われたのである。ドラマの中に登場する二人の女性の江雪瑛と陸玉函は、いずれも喬致庸を恋した人で、陸玉函は喬致庸の家が破産する寸前で、家を救うために喬致庸の義理の姉、母のように喬致庸を育てた未亡人曹氏は、秘かに陸家に縁談を持ちかけ、喬致庸との結婚を約束し、無理矢理に喬致庸を結婚させたのである。喬家の危機は、このお嫁の親からの借金によって乗り越えたのである。しかし、江雪瑛が違う、彼女は喬致庸の竹馬の友で、幼い時からお互いに心の約束を交わし、喬致庸でなければ、結婚しないと心を誓った悲劇な主人公の一人である。彼女は喬致庸の突然の結婚によって夢を砕けさせられた後、別の大金持ちの病弱の息子と結婚させられたのである。しかし、結婚間もなく、彼女の夫はこの世を去った。彼女は大きな遺産を相続したものの、生きた死人のような未亡人となった。この経緯で、喬致庸に対して愛を抱いている一方、憎しみも生まれるようになった。そして、その後、喬致庸の商売を秘かに邪魔し、時期を見て喬致庸を窮境に追い込んだ。喬致庸は、彼女の密告によって投獄され、助かるためには喬家は全財産を投げても足りない窮境になった。しかし、最後はやはり愛の気持ちを捨てきれず、江雪瑛は秘かに自分のかなり財産をつぎ込み、喬致庸の命と喬家企業を救ったのである。『喬家大院』に登場するこの二人の女性は、もはや喬致庸に依存して生きるのではなく、むしろ喬致庸は彼女らがいなくては生きられない存在であったのである。特に、江雪瑛の報復のストー

¹ 小説『商道』が2000年11月に韓国で単行本として出版された後、2001年11月から全50回のテレビドラマ化された。中国語の訳は2003年に出版され、テレビドラマ化されたDVDの中国語訳にも販売されるようになった。一方で、『喬家大院』は2006年2月13日から、旧暦正月のテレビ番組の一つとして、全45回のテレビドラマとして放送が始まった。ドラマの脚本を長編歴史小説に書き直したものが2005年に出版された。

りには、男を生かすか殺すかは女の気持ち次第であるというメッセージが示されていることさえ読み取れる。このような内容こそ、初めて男性が女性を自分と対等な存在とする考えを持っていると言えるであろう。

次に、富をいかに社会に還元させて行くのか、そして困っている人に金を与える方法はどのようにあるべきなのかの問題である。ドラマ『喬家大院』に示されているのは『商道』に似ている面もあれば、違った側面もある。同じような内容として、飢饉が起きた時に、被災者を救うために全財産をつぎ込んで各地から食糧を調達し、家族を総動員して大きな竈をいくつ作らせ、毎日粥を作って、各地から流れてきた被災民に無償で食べさせ、十万人にも上る人の命を救った。異なる内容としては、巨大な富を蓄えた喬致庸は、その資金を無条件に人々に与えるのではなく、子孫に相続させ、自分が経営する「大徳通」という票号グループを全国に展開させ、「汇通天下」の夢を実現させ、商業社会の便利さを図り、さらに低い金利で困った人や商売する人の経営資金として貸出し、商業社会の繁栄に貢献して行くのである。

歴史の記録によると、山西商人の常家は、ある飢饉の時、村の人々を救済するために、わざと自分の家で「戲台」を建設しはじめた。村の人は誰でもよく、一日に一つだけの石や煉瓦を持ってきてくれれば、一日の食事をただで与えることを決行した。飢饉は三年も続いたが、「戲台」の建設も三年間続けていた。常家の家譜にはその真因を記録していた。それによると、その理由は村の人々に食事を与えられる時に、その自尊心を傷つけないためであるという。もう一つの記録はまさに喬家の「大徳通」票号のクライマックスに関わる出来事である。1930年代、蒋介石と閻錫三と馮玉祥との軍閥の間、中原の戦いが繰り広げられ、戦地は河南省の当たりであった。この戦争のために、山西軍閥の閻錫三は大量な軍票「晋钞」（戦時貨幣）を発行した。しかし、戦争が終わった時、その軍票はただの紙切れ同様の価値になった。本来なら、「大徳通」はこのチャンスを掴んで大儲けできたのであったが、「大徳通」は戦時と同じような価値で軍票を回収し、これによって喬家の全財産を使い果たし、二年後、30万両の赤字を持って倒産した。80年の歴史に幕を閉じたのである。当時の記録には、この事件においての方針を決める会議が行われ、その当時の、「大徳通」グループの経営トップである喬映霞（喬致庸の孫）は、次のような言葉を残している。

「これによって「大徳通」が倒産に追い込まれても、我々はこうしなければならないのだ。我々のこれほど大きな財団は、自分の顧客たちに衣食をなくならせる状況にさせることは許されない。貯金する顧客の一人一人に対して、我々はこのようにしなければ、彼らの生命を脅かすことになり、倒産と命との両者を比べてみれば、どちらはより重いのが言わなくても自明のことである。」

このように、同じく商売で儲かった金を社会に還元し、社会を貢献してゆくのであるが、「晋商」のように、社会がそれを絶対必要となる時に躊躇なく散財をし、資金を社会に還元して行くのである。このような散財のやり方は、高慢さを見せないし、財産のあるべき仕方社会に貢献すると言えるのではなからうか。

おわりに

以上のような分析を通して明らかにしたのは、韓国の『商道』にも、中国の『喬家大院』でも、具体的な人物やストーリーが違っているにしても、その内実は同じく、儒教倫理をベースにした商い道を唱える物語であることが判る。中国では、「儒商」という言葉があり、その意味は儒学の教養があつて、儒教倫理に基づいて商売を営む商人のことである。喬致庸は中国近代の「儒商」の代表的な例であり、まさに儒教倫理に従って商売を成功させた商人である。義州商人の林尚沃も、近代韓国における典型的な「儒商」の姿を演じている。小説『商道』には、大量な儒教思想の内容が語られている。そこには、単なる著者の古典教養の深さを見せているだけでなく、儒教思想と「商道」の関係を鋭く分析を成している。従って、小説の内容は、既に物語の領域を超え、儒学思想を語る学術文献に匹敵するさえ言える。勿論、二つの国の「商道」倫理の重点は、いずれも儒教思想における「五常」を中心に考え、「五常」の徳目を商い世界に具体的な事例で解いているのである。

ヨーロッパに比べて、東アジアの国々では、商業社会を開き、成熟したのは遅れたが故に、儒教思想は商業発展に貢献するところか、それを遅らせた原因であるという認識さえあつた。マックス・ウェバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』という名著にある指摘が周知のことである。マックス・ウェバーに対して、いままで、東アジアの学者の間、いろいろの批判を提出したものの、商業において儒教思想が貢献した実例を挙げて反論するのは、この二つの物語は初めてのことである。キリスト教倫理を根底に横たわれている資本主義の精神は、商業のグローバル化時代の到来によって、その欠点を一層露呈するようになってくるに違いない。その欠点を克服し、より多面的な価値観と倫理観を認め合つて、新たな時代に適応する商業倫理の構築を急務として、大きな課題として、われわれの前に立ち現れている。

特に、世界経済が混乱している今日社会には、韓国と中国にける儒教思想に基づいた二人の近代の経営者の伝説は、人々に大いにその啓発を与えるに違いないであろう。また、それは北東アジアの国々が共有している儒教文化にある「五常」倫理は、商業社会が進んでいるグローバル時代には、どのような意義を持てるのか、持っているのか、その「問い」として、これからさらに、常に我々に向けていると言えよう。

主要参考文献

- 1, 崔仁浩著, 青木謙介訳『商道』, 講談社, 2008年5月。
- 2, 崔仁浩著, 王宜勝訳『商道』, 世界知識出版社, 2003年8月。
- 3, 連続テレビドラマ『商道』(50回)。
- 4, 連続テレビドラマ『喬家大院』(45回)
- 5, 李秀海著『喬家大院』(小説), 上海辞書出版社, 2005年12月。
- 6, 郭梓林等著『喬致庸の経済学』, 海南出版社, 2006年12月。
- 7, 『晋商』(8回ドキュメンタリー), 中国科学文化音像出版社出版。
- 8, 王宝明等著『晋商翹楚—喬致庸の用人・経商・処世の道』, 清華大学出版社, 2006年11月。